
僕と彼女と廻る町

富田大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女と廻る町

【Nコード】

N5362G

【作者名】

富田大介

【あらすじ】

僕と彼女が紡ぎだす、愛と感動のストーリー！や僕と彼女が異世界に連れて行かれて、魔法を使って大バトル！なんてものでは全くもってありませんのであしからず。馬鹿で純情？で一途に白木さんに惚れている【僕】と自分では女の勘が鋭いとか思っているけど、本当はとってもニブい【彼女】の2つの視点から彼らの日常を書いた、連作短編です。非常にぬるくなっておりますので、刺激が欲しい！熱いのがいい！と思っっている方にはお勧めは出来ません。

序話・商店街は眠らない

僕は駆け抜けていく。静まり返った夜の街を。

このような言い方をすると、ありがちな青春物語のページのように聞こえる。

僕はひそかに思いを寄せている白木さんを危機から救うという使命を背負い、夜の商店街を息を切らしながら走っている。

自分で言うのもなんだが、なかなかカッコいい展開ではないだろうか。

若干のB級映画感は拭えないが、それでも充分なほどカッコいい。

だが、今はそのような考えに浸っている場合ではない。

こうしている間にも彼女の危機は刻一刻と迫ってきているはずだ。

『走れ！メロス！』

頭の中に有名すぎる言葉がよぎる。

「待っていてくれたまえよ、セリヌンティウス」

と呟きながら下り坂に差し掛かったときに、僕は更にスピードを上げようとした。その瞬間、踏み込もうとした足が空を切る。

『日頃運動をしていない奴が急に全力で運動したら、そうなるに決まってるじゃん』

憎々しい坂田という友人の声が聞こえた気がした。

三回転くらい綺麗に廻って、地面に倒れこむ。静かな夜の、といつてもまだ9時くらいの商店街に僕は一人でうずくまっていた。

「僕はもう疲れたよパトラッシュ・・・」

今のこの状況に猛烈に嫌気がさした。

このまま、お迎えが来るのを待っていていようか。そんな考えがよぎる。

回転した際に頭を打ち、軽く前後の記憶があいまいになっている脳で思う。なんで白木さんが危機になっているんだ？

といより、白木さんの危機ってなんだったわけ？

僕は携帯を開き、走り出す原因となった坂田から来たメールを見る。

「やばいぞやばいぞ、お前の愛しの白木様がピンチだ。男から絡まれているぞ。商店街のところに居るから急げ！」

おお、それは一大事だ。白木さんはもしかすると今頃貞操の危機に陥っているかもしれない。

僕が行かなくてどうする。

僕が白木さんを守らなくてどうする。

『先刻見たのは夢だ、悪い夢だ。立て、立つんだメロス！』

その時、ピロリララ〜と軽快で頭の悪そうな音を立てながら、携帯がメールを受信したことを告げた。

邪魔をするな！と心の中で叫んだのだが、とりあえずメールの確認はする。携帯電話に縛られる、現代っ子の哀しさだ。

坂田からだった。

「……みたいな展開があったらお前は、何も考えずに飛び出しそうだよな（笑）」

「（笑）じゃねーよ！ふざけんな馬鹿野郎！」

僕は空に向かって叫んだ。軽く叫び声はこだまする。近所迷惑だ、と散歩をしているおじさんに怒られた。

わたしがその叫び声を聞いたのは、我が家では絶対的な権力を持っている父親から、酒のつまみを買ってこいという命を受け、商店街の中にあるコンビニで酒のつまみを買って帰る途中だった。

ある程度静まり返っている商店街に響き渡った「馬鹿野郎！」という叫び声。

その声にわたしは、なんだかほんの少し聞き覚えがあるような気がして気になった。

小さい頃から、この商店街の近くのアパートに住んでいるので、この辺りの地形はばっちり把握できている。

もし、変な人だったらすぐ逃げよ。そう思うと、わたしは声が出た方向にそっと近づいていった。

声の主であると思われる人は、わたしと同じ部活をしている後輩だった。

叫ぶなんてことをしたのは、色々と思春期らしい理由があるのかもしれない。好きな人に振られたとか、そんな初々しい理由が。ここは、そっとしておいてやるべきかな。

一度はそう思ったのだが、私の中に眠る野次馬根性、良く言えば探究心がそれを阻み、『何故彼は叫んでいたのか』という原因の追究を試みることにした。

後ろから声を掛ける。

「今晚は。叫んでたのって君？」

後輩は驚いた顔でこっちを振り向き言う。

「せ、先輩！いつから居たんですか？」

「その辺りを歩いていたとき叫び声が聞こえてき、何かと調べてきたわけだよ。あんまり夜中に叫んじゃ駄目だよ」

「さっきも、怒られました」

とその後輩は自嘲気味に言うと、先輩はどうしてこんな時間に？と尋ねてきた。

わたしが理由を話すと

「こんな夜中に女の人が一人は危ないですよ。家の近くまで送りま

す

と言って来た。

ほう、なかなか紳士じゃないか。と思っただが、家はもう近くだし送っってもらふ必要はない。

「いいよ。わたしの家すぐそこだし。それよりなんで叫んでたのさ」

「いや、ちょっと・・・色々ありましてね・・・」

と彼はやけに恥ずかしそうな顔をした。

「好きな子のこととか？」

彼の顔が真っ赤になっていく。青春だなあ、これ以上聞くのはちょっと可哀想か。

「いいねー、青春。わたしも応援してあげるよ。いつでも相談してくれたまえ」

そう言いながらわたしは、さっき買った酒のつまみを一つ彼に向かって投げる。

チーカマを失ってしまったか・・・お父さんに怒られるかな。

なんてことを考えながら、じゃーね。と言い家へと歩き始めた。

後ろから後輩の声が聞こえる。

「ありがとございませす。さようなら、白木先輩!」

振り返ると、彼はやけに嬉しそうな顔でこっちを見ていた。

そんなに好きだったのかな。チーカマ。

お父さんには怒られるだろうが、まあいい。相手が喜んでいる時は、自分まで嬉しいものだ。

少し偽善的かな。とわたしは笑って彼に手を振る。

彼は、いつまでも手を振り返して来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5362g/>

僕と彼女と廻る町

2010年12月11日13時53分発行